縄文ファッション … さまざまなかざり

● 縄文時代の服

縄文時代の遺跡からは、ぬい針や糸、せんい製品などが見つかっています（十勝では見つかっていませんが、くさって土にかえったのでしょう）。

縄文の人々は、植物のせんいを編んだ「布」や動物の毛皮などで服を作っていたようです。

● 縄文時代のアクセサリー（装身具）

旧石器時代（15,000年くらい前）には、すでに、かんらん石※4やコハク※5のビーズ玉が作られていました（知内町の湯の里遺跡など）。そして、縄文時代には、今あるほとんどの装身具が（材料はちがうが）作られるようになりました。

ヘアピン・くし・ヘアバンド・耳かざり・ペンダント・ネックレス・ブレスレット・腰かざりなどなど。最近も流行しているタトゥー（入れ墨）やボディーペインティングもおこなわれていたようです。

こうしたものは、ただ身をかざるためだけのファッションではなく、まじないの道具だったり、悪霊から身を守る意味があったり、また、自分をりっぱに見せるためだったのかも知れません。

ただ、見方によれば、身をかざって美しく・かっこよく見せたり、恋人同士がおそろいのネックレスや指輪をつけたりする「ファッション」は、人の心をあやつる「まじない」のひとつなのではないでしょうか？

● 十勝縄文の装身具 1

八千代遺跡（→ｐ90）や暁遺跡（→ｐ79)(帯広市）では、およそ 8,000 年前のビーズ玉 (かんらん石※4、蛇紋岩※6）やペンダント（コハク※5、泥岩※7）が見つかっています。これらのかんらん石やコハクは、大陸から持ちこまれたものではないか、と考えられています。

八千代遺跡では、親指の頭くらいのメノウを戸蔦別川から拾ってきて、穴を開けかけたものが見つかっています。いっしょに穴あけ用のキリ（石器）も見つかっていて、何かの事情で作業を中断したようです。

6,000年くらい前には、小林遺跡（芽室町：→ｐ95)で、Ｃの形をした「玦状耳かざり」が使われていました。墓に埋葬された人の、頭の近くに置かれていたようです（左ページ）。

同じタイプの耳かざりが、大陸の東アジア一帯に広がっていました。十勝では、ほかに十勝川温泉１遺跡（音更町：→ｐ94）でも見つかっています。

十勝で見つかったものですが、材料は遠い場所で産出した蛇紋岩であること、また、とてもていねいな作りであることから、多くは遠くの場所で専門的な「職人たち」の手によって作られたものだと思われます。

5,000年くらい前に道央から道東北部で使われていたヒスイ玉は、新潟県の糸魚川産のヒスイで作られていることが、蛍光Ｘ線分析という方法で確かめられています。

(左) 腕輪と滑車状耳かざり (上利別20遺跡：足寄町)。　**(右) 八千代遺跡 (帯広市) で見つかった玉やペンダント。**

● 十勝縄文の装身具 2

縄文時代が終わりに近づくと、北海道東北部を中心に、コハク玉※5が大量に副葬※2されている墓がつくられます。十勝でも池田３遺跡につくられていた墓から、いろいろな形をしたコハク玉が141個見つかりました。

これらのコハクは、サハリン産ではないかといわれています。

上利別20遺跡（→ｐ96）の3,000年前ころの墓からは、土を焼いて作られた滑車のような形をした耳かざりやうるしぬりのクシ（のようなもの）が見つかり、さらに、もう少し新しい時期の腕輪（ブレスレット：土製）も見つかっています。

● 縄文ファッションは世界をつなぐ

このように身をかざる文化は、とても長い歴史を持っています。

そして、装身具を調べることで、縄文時代には北海道と本州、あるいは大陸との間に、広く交流があったことがわかります。石器や土器とともに、縄文ファッションも世界をつないでいたのです。

縄文ファッション
左上から、耳かざり、ネックレス、ブレスレット（腕輪）。
右上から、クシ、ヘアピン、ペンダント、貝のブレスレット。

(写真左：足寄町教育委員会蔵、写真右とイラスト：帯広百年記念館埋蔵文化財センター蔵)

※４　かんらん石（かんらんせき）：鉱物（こうぶつ）の一つ。固く、オリーブのような緑色。透明で割れ目の少ないものは宝石（ペリドート）とされる。
※５　コハク（琥珀）：木の樹脂（じゅし）が地中にうまり、長い年月をかけて固まった宝石。
※６　蛇紋岩（じゃもんがん）：かんらん岩（かんらん石を多くふくむ岩石）が水と反応してできる岩石。表面に蛇（ヘビ）のようなもようが見られることから名づけられた。
※７　泥岩（でいがん）：泥が海底や湖底などにたまり、固まった岩石（→堆積岩ｐ28）。